研究結果報告

報告日 平成２５年　３月　４日

グループ名	清二研究会	フリガナ 代表者氏名	マエザワ　クラト 前沢　蔵人
学校名 （代表者）	江戸川区立清新第二小学校		
研究テーマ	「通常学級と特別支援学級の児童の交流による相互への影響」		
研究期間	平成１９年　４月　１日　から　平成２５年　３月３１日　まで		

主題設定の理由

本校は平成１９年度より特別支援学級を併設している。

開設以来，通常学級の児童と特別支援学級の児童の交流及び共同活動は急務の課題であった。

そこで，年度を追って児童間及び指導者間でさまざまな交流の機会を増やし，よりよい教育活動を行えるよう研究を重ねてきた。

研究の概要

１児童間の交流と支援の方法

①授業交流

通常級の授業に特別支援学級の児童が参加することにより，お互いに良い影響を与え合うことを実証した。参加するのは全員ではなく児童の実態を考慮して行った。

（１）音楽科

６月の運動会後、同学年の音楽科の全授業に参加した。

対象児	通常学級：第４学年（１６名） 特別支援学級：第４学年（１名）
交流と支援の方法	・器楽、声楽両方とも、通常学級の児童に混じって交流を行った。 ・指示が分からない部分については、教師が個別に言葉かけを行った。 ・グループで行動する場面も設定し、子供同士、自然に関われる機会を設けた。
成果と課題 ○成果 ●課題	○特別支援学級での音楽に比べて、本人に合った、より高いレベルでの学習を行うことができた。 ●グループ活動など、通常学級の子供との関わる機会はあったが、本時の実態により、子供同士の関わりは難しかった。

（２）算数科

１年間を通して、算数科の全授業に参加した。

対象	通常学級：第５学年（２０名） 特別支援学級：第５学年（１名）
交流と支援の方法	・苦手なところは授業を行う通常学級担任教師が個別に対応した。 ・本校では習熟度別の少人数学習を行っているが、対象児の学習状況を把握して継続的に指導するために、常に通常学級担任のクラスで授業を受けることとした。 ・基本的に「問題、（解決の）方法、自力解決、友達の考え（発表）、まとめ」という流れで授業を進めた。
成果と課題 ○成果 ●課題	○毎回の流れがほとんど同じであり、同一の指導者により指導が継続するために、特別支援学級の児童は安定して授業を受けることができた。 ○一緒に活動することで，通常学級の児童は正解・不正解をただ追求するだけではなく，より良く考えようという態度を養うことができた。 ●特別支援学級の児童にとって難しい単元でも授業を一緒に受けた。それにより，一時的に意欲が低下することもあった。

（３）総合的な学習の時間

本校では総合的な学習の時間に第５，６学年全員参加のブラスバンド活動を行っている。児童は，自らの課題を活動の中で発見し，それを解決するために担当楽器ごとに相談したり，練習したりしている。そしてそれらの活動を毎回ポートフォリオに記録し，自分の成長を実感すると共に自分の生き方を考える機会としている。

対象児	通常学級：第５学年（２０名），第６学年（２１名） 特別支援学級：第５学年（９名），第６学年（３名）
交流と支援の方法	・児童の実態に合わせて，マーチングキーボードとトランペットを担当楽器とした。マーチングキーボードは特別支援学級の児童のみで担当し，総合的な学習の時間以外でも特別支援学級の授業の中で練習を行った。トランペットを担当する児童は総合的な学習の時間において，通常学級の児童と共に課題解決型の練習形態をとった。 ・学習の成果を発表する場として，毎週の朝会での演奏，地域の祭りでのパレード，運動会を設定した。
成果と課題 ○成果 ●課題	○特別支援学級の児童は，自分の力に合わせた楽器を担当することで満足して活動に取り組むことができた。発表の場を設けることで，自分たちが認められる楽しさを味わうことができた。 ○通常学級の児童にとっては特別支援学級の児童の良さを実際に目の当たりにすることで，友達の良さを素直に認める態度が育ってきた。

②宿泊的行事

次の２つの宿泊的行事において，交流を図った。

（１）林間学校（２泊３日）

本校の第5学年は通常級の児童が20名なのに対して特別支援学級の児童が9名在籍し，合同で夏季休業中の宿泊学習を行った。2泊3日の宿泊学習で一緒に行動できる部分と，別々で指導した方がよい部分について事前に検討を重ねて臨んだ。

対象児	通常学級：第５学年（２０名） 特別支援学級：第５学年（９名）
交流と支援の方法	・昼間の活動及び食事は通常学級と特別支援学級の児童が全グループに入るような班編制を行った。特に支援の必要な児童がいる班には，特別支援学級の担任が入って補助を行った。 ・１日目の部屋は通常学級の児童と特別支援学級の児童を別部屋として，それぞれの学級のねらいに合わせた指導をしたり活動を行わせた。２日目は児童間の交流をねらいとして両学級の児童が混在するように部屋割をした。（男女は別）。 ・２日目は，比較的歩きやすいコースを選び，班ごとにハイキングをした。ただし，体力に不安のある児童はバスに乗って歩行距離を短くするなどの支援を行った。
成果と課題 ○成果 ●課題	○通常学級，特別支援学級それぞれの目的にあった活動と交流の両方を無理なく行うことができた。 ○通常学級の児童は，特別支援学級の児童と長時間にわたってかかわることで，相手のことを考えながら行動することができた。 ●今回は参加児童が２８名に対して管理職を含めたスタッフが８名（うち４名は特別支援学級担任）同行した。夏季休業中の行事のため多くのスタッフが同行することができたが，人的な配置が不可欠であることも改めて分かった。

（２）セカンドスクール（６泊７日中の２泊３日）

本校では，６泊７日の宿泊学習を第６学年で行っている。毎年，新潟県の魚沼市に宿泊し，普段できない活動や共同学習を行ったり，地元の祭りに参加して交流を深めたりする場としている。例年，２学期が始まった９月に実施している。

対象児	通常学級：第６学年（２１名） 特別支援学級：第６学年（３名）
交流と支援の方法	・通常学級児童は６泊７日で行っているが，特別支援学級の児童はその中の２泊３日を，通常級の児童のグループに加わり，部屋も同室で過ごした。その間は特別支援学級の担任も同行した。
成果と課題 ○成果 ●課題	○寝食を共にすることで、お互いの理解が深まった。 通常学級児童は、声かけや必要な手助けを上手にしてあげられるようになってきた。 ○特別支援学級児童は、係の仕事、行動などを見て学び、意欲的に活動することができるようになってきた。

③その他の交流

上記以外でも，次のような場面において交流を行った。

・たてわり班活動では，全グループに全学年の児童及び特別支援学級の児童が混在するように班編制をし，すべての活動を一緒に行うようにした。支援の必要な児童には，介助員がついて補助をした。
・朝会以外にも，特別支援学級の児童は全学校行事に通常級の児童と同じように参加した。児童の祭り「二小まつり」では，特別支援学級でも店を出し，全児童が来店できるようにした。
・運動会では、特別支援学級のみの種目は設けなかった。その代わり、特別支援学級の児童は各学年の演技、競技に参加した。通常学級の児童は、同学年の友達に対してやさしく言葉かけをしたり、さりげなく助けたりという姿が多く見られた。

２指導者間の交流

①同じ主題での校内研究

研究主題を同じに設定し，特別支援学級の授業を全員が参観，協議することで，学習の苦手な児童への指導法や，個々の児童の特性を考慮した指導の仕方を考えた。

今年度は、「読むことを通して，国語力を育てる指導法の工夫」として、共通のテーマで通常学級４クラス，特別支援学級３クラスで授業研究を行い，児童の指導について方法や考え方を共有した。

②通常の授業の相互参観

通常時の授業をそれぞれの担任が参観し合うことで，児童理解を深めるとともに通常学級の担任は指導法を，特別支援学級の担任は担当学級の児童と同年齢の児童の発達を知る機会とした。

研究の成果と今後の課題

児童の立場から

○障害の有無にかかわらず，友達の良さを認め，賞賛できるようになった。
○通常学級の児童は，特別支援学級の児童とかかわる中で，相手の気持ちを考えたり，接し方を工夫したりするなど，対人スキルを学ぶことができた。
○特別支援学級の児童の中には，交流の中で活躍する機会も増えて，自信を高めることができた児童もいる。
●授業交流をする児童は、その時間は特別支援学級の授業を抜けるため、好きな授業を受けられないことによるストレスを感じる児童もいた。

指導者の立場から

○特別支援学級の児童理解を通して，発達障害をもっていたり学習が苦手だったりする児童への指導法を学ぶことができた。
○障害理解が高まったことで，個々の児童の実態をより正確に把握することができるようになった。
○通常と特支，どちらの学級担任も全校児童の実態を把握することができ，全校一丸となって児童の指導に当たることができた。
●どの授業や行事において、どのような交流をするかは児童一人一人の特性に大きく依るため、児童の適性や交流の適時性を判断するのが難しい。